微動アレイ観測データ 処理スクリプト PyArrayの紹介

京都大学 防災研究所 後藤浩之

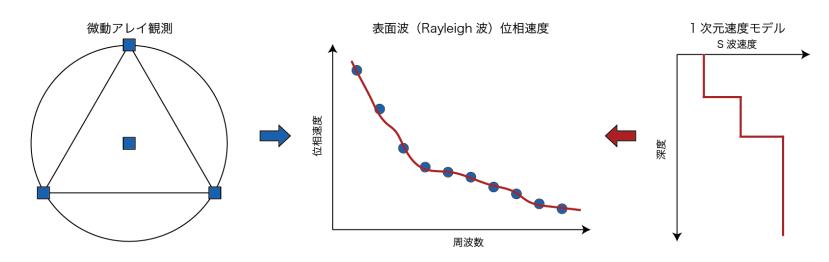


特徴

- 微動アレイ観測のデータ処理を行うためのパッケージ群を含むスクリプト
- <u>Python</u> (ver.3) パッケージ(一部Fortran)で書かれているので, pythonが動作する環境であればOS(Windows / Mac OS / Linux)は何でも良い

出来ること

- 1. 微動アレイ観測データからH/Vスペクトルを推定する
- 2. 微動アレイ観測データからRayleigh波の位相速度(分散曲線)を推定する
- 3. 1次元速度モデルからRayleigh波の位相速度とH/Vスペクトルを計算する(フィッテング)



準備

0. 実行環境の準備

Python (ver.3)といくつかの関連パッケージのインストールが必要です.

- Python
 - NumPy (>= 1.19)
 - Matplotlib (>= 3.2)
 - SciPy (>= 1.5)

Pythonのインストールは Python環境構築ガイド を参考にしてください.

NumPy, Matplotlib, SciPyのインストールは pip を利用すると簡単です

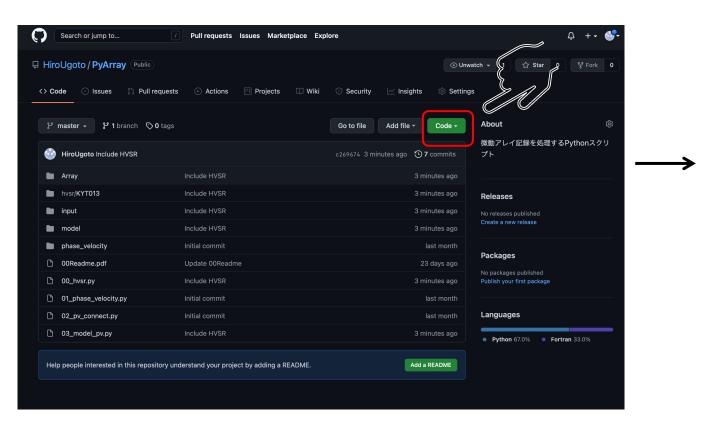
- > python —m pip install numpy
- > python —m pip install matplotlib
- > python —m pip install scipy

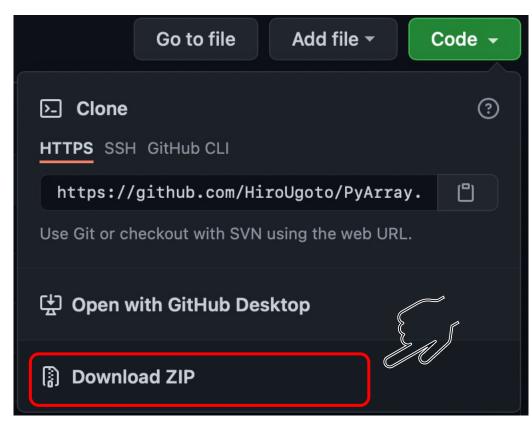
準備

1. スクリプトのダウンロード

以下のURLからスクリプト(データ含む)一式をダウンロードしてください

https://github.com/HiroUgoto/PyArray





準備

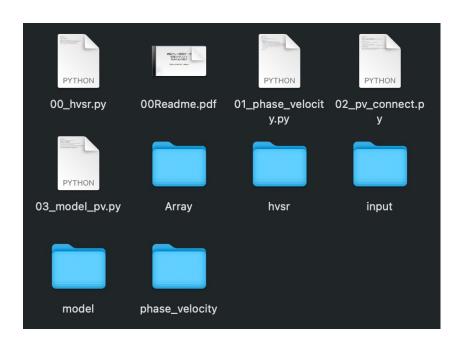
2. ダウンロードファイルの展開

ダウンロードしたファイルを, pythonが使える(任意の)フォルダの中に展開してください. 以下のようなファイル構成となります. 詳細は後ほど説明します

- 00_hvsr.py
- 01_phase_velocity.py
- 02_pv_connect.py
- 03_model_pv.py
- Array/
- hvsr/
- input/
- model/
- phase_velocity/

解析用のスクリプト

- ーパッケージ群
- H/Vスペクトル比
- 微動観測データと設定ファイル
- 1次元速度モデル
- 位相速度



解析手順

以下の手順で解析を進めます.

Step0 観測データからH/Vスペクトルを推定する 00_hvsr.py

Step1 アレイサイズ毎に観測データからRayleigh波位相速度を推定する 01_pase_velocity.py

Step2 複数のアレイサイズの位相速度をまとめて1つのRayleigh波位相速度にする 02_pv_connect.py

Step3 1次元速度モデルから位相速度とH/Vスペクトルを計算してフィッテイングさせる 03_model_pv.py

動作確認しましょう (Step0)

以下のコマンドでスクリプトを動かします

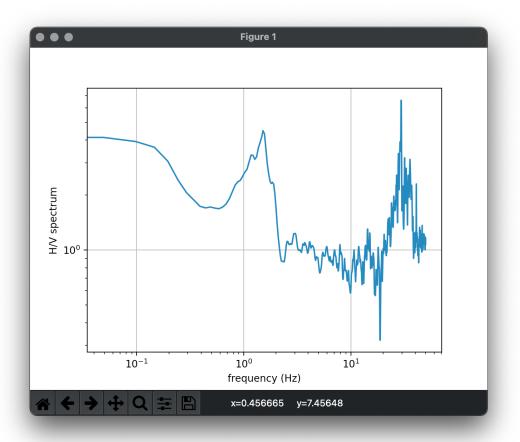
> python 00_hvsr.py

(注意)

環境によっては python ではなく python3 コマンドですので, python を python3 に置き換えてください.

右のようなグラフが出力されれば成功です

→ 設定ファイルは後ほど説明します



動作確認しましょう (Step1)

以下のコマンドでスクリプトを動かします

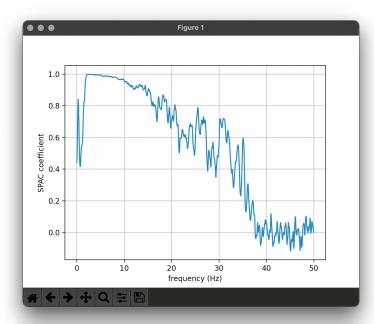
> python 01_phase_velocity.py

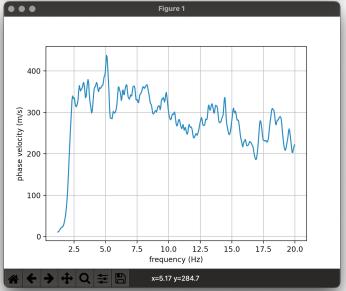
(注意)

環境によっては python ではなく python3 コマンドですので, python を python3 に置き換えてください.

右のようなグラフが8回出力されれば成功です (表れたグラフのウィンドウを閉じると次のグラフが表れます)

→ 設定ファイルは後ほど説明します





動作確認しましょう (Step2)

以下のコマンドでスクリプトを動かします

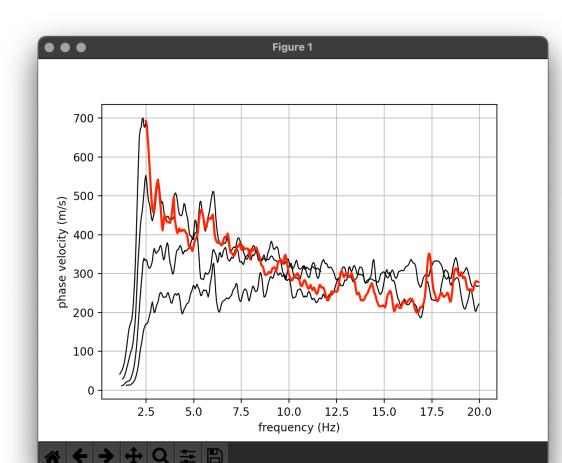
> python 02_pv_connect.py

(注意)

環境によっては python ではなく python3 コマンドですので, python を python3 に置き換えてください.

右のようなグラフが出力されれば成功です

→ 使い方は後ほど説明します



動作確認しましょう(Step3)

以下のコマンドでスクリプトを動かします

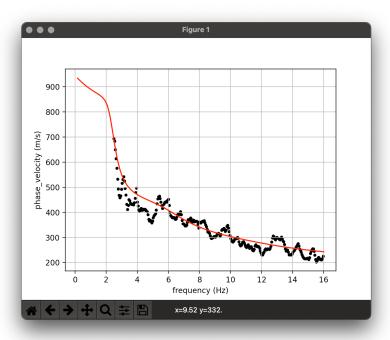
> python 03_model_pv.py

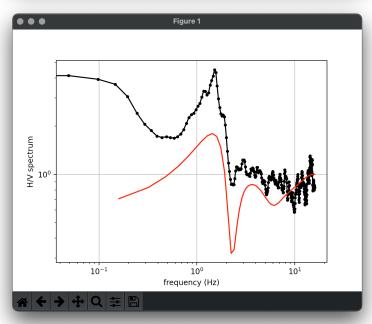
(注意)

環境によっては python ではなく python3 コマンドですので, python を python3 に置き換えてください.

右のようなグラフが2回出力されれば成功です

→ 使い方は後ほど説明します





使い方(Step0)

Step0

観測データからH/Vスペクトルを推定する

使うスクリプト 00_hvsr.py

設定ファイル/データファイルのサンプル input/KYT013 input/OSK002

設定ファイルの準備(Step0)

・ 微動データに関する情報や観測条件を設定します サンプルファイル(input/KYT013/hv.ctl)

```
# data directory
./input/KYT013/data/1m/
# output directory
./hvsr/KYT013/
# sampling frequency[Hz]
100
# segment length[s], maximum number of segment
20.48 40
# band width[Hz]
                                     5
0.3
# Number of sensors
# r[m], N?E[deg], file_name, center?[center:1 or arc:0]
0 0 A01.acc 1
```

- 1 微動データの格納フォルダ スクリプトとの相対位置で記述する
- 2 位相速度の出力先のフォルダ スクリプトとの相対位置で記述する 用意されていない場合には自動で作成される
- 3 微動データのサンプリング周波数 (Hz)

- 4 微動データを処理する際の セグメント長さ (秒) とセグメント数
- 5 平滑化のバンド幅 (Hz)

設定ファイルの準備(Step0)

・ 微動データに関する情報や観測条件を設定します サンプルファイル(input/KYT013/hv.ctl)

```
# data directory
./input/KYT013/data/1m/
# output directory
./hvsr/KYT013/
# sampling frequency[Hz]
100
# segment length[s], maximum number of segment
20.48 40
# band width[Hz]
                                     5
0.3
# Number of sensors
# r[m], N?E[deg], file_name, center?[center:1 or arc:0]
0 0 A01.acc 1
```

6 解析に用いる地震計の数(1で良い)

│7│地震計の位置とデータに関する情報

1列目:0で良い

2列目:0で良い

3列目: データファイル名

□ + このファイル名 で処理されます

4列目:1で良い

データファイルの書式 (Step0)

微動データファイルの書式 サンプルファイル (input/KYT013/data/1m/A01.acc)

```
3.887310881342740374e-04
3.255279481342740434e-04
1.043169581342740372e-04
-2.749018818657259270e-04
-7.173238618657258852e-04
-1.317753691865725801e-03
-1.949785091865725850e-03
-2.645019631865725730e-03
-3.751074581865725913e-03
-5.015137381865725913e-03
-...
```

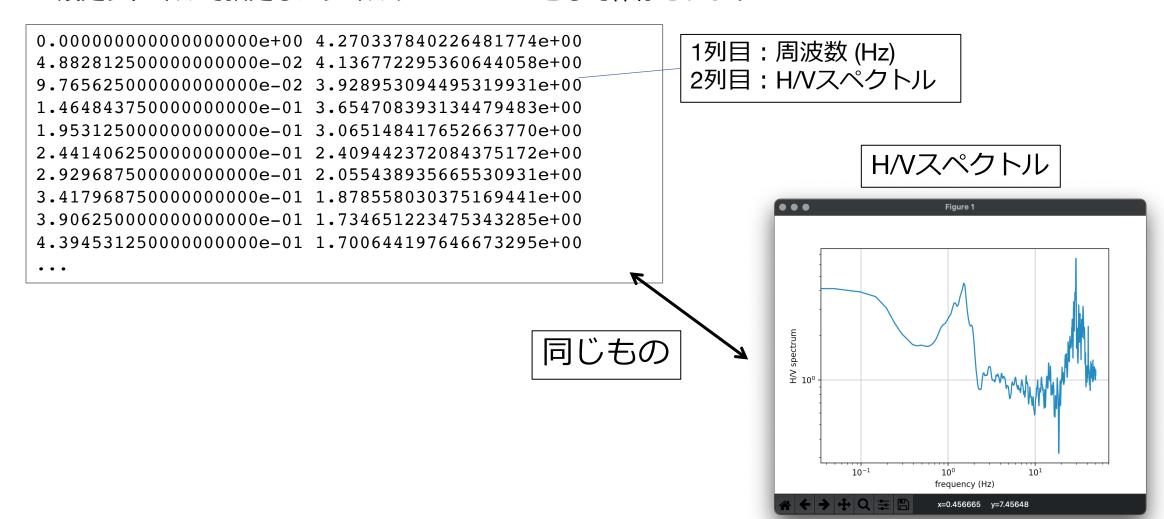
上下動成分の振幅値が1列目に、水平動が2、3列目に並ぶようにする 加速度/速度や単位はなんでも良いが、全てのデータで揃えておくこと

スクリプトの使い方(Step0)

スクリプトファイルの赤字の箇所を書き換えます 00_hvsr.py

出力結果(Step0)

H/Vスペクトルがファイルに出力されます 設定ファイルで指定したフォルダに hvsr.dat として保存されます



使い方(Step1)

Step1

アレイサイズ毎に観測データからRayleigh波位相速度を推定する

使うスクリプト 01_pase_velocity.py

設定ファイル/データファイルのサンプル input/KYT013 input/OSK002

設定ファイルの準備(Step1)

微動データに関する情報や観測条件を設定します サンプルファイル(input/KYT013/01.ctl)

```
# data directory
./input/KYT013/data/1m/
# output directory
./phase velocity/KYT013/1m/
# sampling frequency[Hz]
100
# segment length[s], maximum number of segment
20.48 40
# band width[Hz]
                                     5
0.3
# Number of sensors
# r[m], N?E[deg], file name, center?[center:1 or arc:0]
0 0 A01.acc 1
1 0 A02.acc 0
1 120 A03.acc 0
1 240 A06,acc 0
```

- 1 微動データの格納フォルダ スクリプトとの相対位置で記述する
- 2 位相速度の出力先のフォルダ スクリプトとの相対位置で記述する 用意されていない場合には自動で作成される
- 3 微動データのサンプリング周波数 (Hz)

- 4 微動データを処理する際の セグメント長さ (秒) とセグメント数
- 5 平滑化のバンド幅 (Hz)

設定ファイルの準備(Step1)

微動データに関する情報や観測条件を設定します サンプルファイル(input/KYT013/01.ctl)

```
# data directory
./input/KYT013/data/1m/
# output directory
./phase velocity/KYT013/1m/
# sampling frequency[Hz]
100
# segment length[s], maximum number of segment
20.48 40
# band width[Hz]
                                     5
0.3
# Number of sensors
# r[m], N?E[deg], file name, center?[center:1 or arc:0]
0 0 A01.acc 1
1 0 A02.acc 0
1 120 A03.acc 0
1 240 A06,acc 0
```

6 アレイの地震計の数

| 7 | 地震計の位置とデータに関する情報

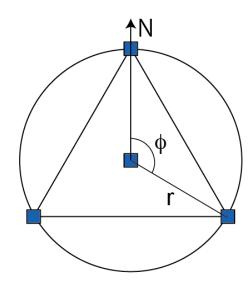
1列目:中心からの距離 (m)

2列目:北からの方位角 (degree)

3列目: データファイル名

| 1 | + このファイル名 で処理されます

4列目:アレイ中心の場合1,円周上0



データファイルの書式 (Step1)

微動データファイルの書式 サンプルファイル (input/KYT013/data/1m/A01.acc)

```
3.887310881342740374e-04 2.625107307043840228e-05 -3.224589089940839863e-06 3.255279481342740434e-04 8.945421307043839631e-05 -3.482615908994083476e-05 1.043169581342740372e-04 3.106652030704384025e-04 -9.802929908994083557e-05 -2.749018818657259270e-04 7.530871830704383065e-04 -1.928340090899408131e-04 1.3177536918657258852e-04 1.353517013070438223e-03 -5.720528490899408043e-04 1.949785091865725850e-03 2.459571963070437874e-03 -7.932638390899407563e-04 -2.645019631865725815e-03 5.208908553070437479e-03 -2.626154899089940854e-03 -5.015137381865725913e-03 4.576877153070438298e-03 -9.512716890899406601e-04 ...
```

上下動成分の振幅値が1列目に並ぶようにする

1つの設定ファイルで扱うデータは、全て時刻が同期されているとして扱われるため、全ての時刻を揃えておくこと

加速度/速度や単位はなんでも良いが、全てのデータで揃えておくこと

スクリプトの使い方(Step1)

スクリプトファイルの赤字の箇所を書き換えます 01_phase_velocity.py

```
import numpy as np
import Array
                                設定ファイルのあるフォルダ
ctl dir = "input/KYT013/"
ctl list = ["01.ctl","02.ctl","05.ctl","10.ctl"]
                                               設定ファイルのリスト(複数設定できる)
                                               この場合, 1m, 2m, 5m, 10mアレイのデータを
fmin list = []
for file in ctl list:
                                               まとめて順に解析します
   control file = ctl dir + file
   param,data = Array.io.read control file(control file)
   segment data = Array.analysis.segment selection(param,data)
   freq,spac coeff = Array.analysis.spac coeff(param,segment data,plot flag=True)
   freq spac,vel spac = Array.analysis.spac phase velocity(param,freq,spac coeff,fmin=0.5*fmin,plot flag=True)
   Array.io.output data file("spac.vel",param,freq spac,vel spac)
   fmin list += [fmin]
print(fmin list)
```

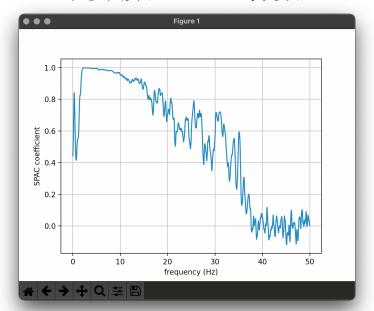
出力結果(Step1)

・設定ファイル毎に、コンソール表示と2つのグラフが表れます コンソール表示(抜粋)

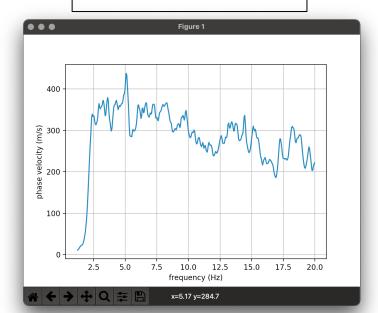
```
Resolve frequency range
+ frequency gives minimum NSratio [Hz] : 2.392578125
+ frequency not exceeding NSratio 1.0 [Hz]: 0.0
```

これより高い周波数 (実際にはより高い周波数) の位相速度の結果しか使えません

周波数一SPAC係数

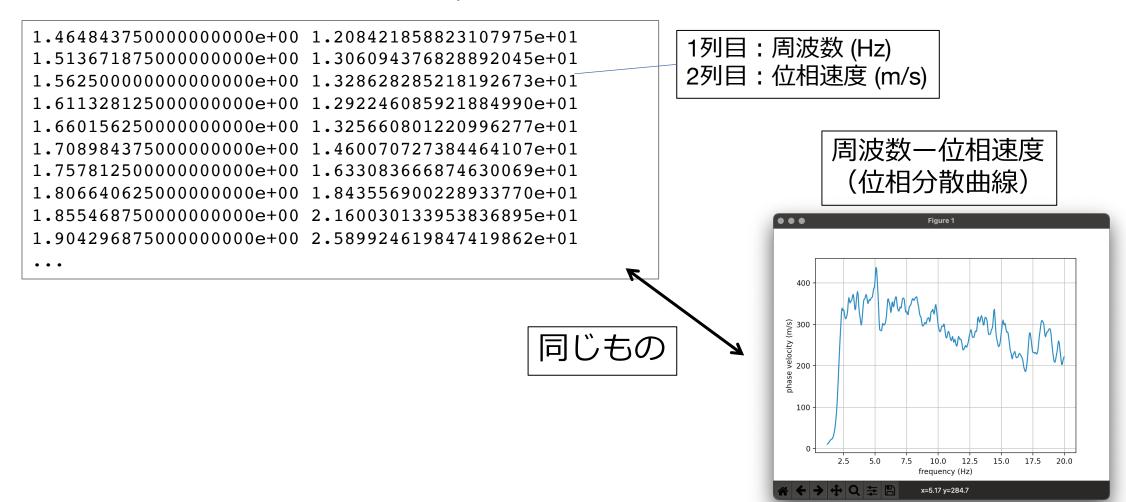


周波数一位相速度 (位相分散曲線)



出力結果(Step1)

・ 設定ファイル毎(アレイ半径毎)に,位相速度がファイルに出力されます 設定ファイルで指定したフォルダに spac.vel として保存されます



使い方(Step2)

Step2

複数のアレイサイズの位相速度をまとめて1つのRayleigh波位相速度にする

使うスクリプト 02_pv_connect.py

データファイルのサンプル(Step1の出力結果) phase_velocity/KYT013/

スクリプトの使い方(Step2)

スクリプトファイルの赤字の箇所を書き換えます

02_pv_connect.py

位相速度データのあるフォルダ

位相速度データファイルのリスト(複数設定できる) 小さいアレイ半径から順に並べること

```
import numpy as np
import Array
input pv dir = "phase velocity/KYT013/"
file list = ["1m/spac.vel","2m/spac.vel","5m/spac.vel","10m/spac.vel"]
output pv file = "phase velocity/KYT013.vel"
                                                      結果を出力するフォルダ
fmax = 20.0
fmin list = [12,8,4,2.5]
input pv files = [input pv dir+s for s in file list]
ns = len(fmin list)
fr = fmin list + [fmax] + fmin list[0:-1]
freqency range = list(zip(*[fr[i:i+ns] for i in range(0,2*ns,ns)]))
print(input pv files)
print(freqency range)
freq list,pv list = Array.io.read pv files(input pv files)
freq,vel = Array.analysis.connect phase velocity(freq list,pv list,freqency range,plot flag=True)
Array.io.output pv file(output pv file,freq,vel)
```

スクリプトの使い方(Step2)

スクリプトファイルの赤字の箇所を書き換えます 02_pv_connect.py

```
import numpy as np
import Array
input pv dir = "phase velocity/KYT013/"
file list = ["1m/spac.vel", "2m/spac.vel", "5m/spac.vel", "10m/spac.vel"]
output pv file = "phase velocity/KYT013.vel"
                                   最大周波数
fmax = 20.0
fmin list = [12,8,4,2.5]
                                                    接続周波数のリスト
input pv files = [input pv dir+s for s in file list]
ns = len(fmin list)
fr = fmin list + [fmax] + fmin list[0:-1]
frequency range = list(zip(*[fr[i:i+ns] for i in range(0,2*ns,ns)]))
print(input pv files)
print(freqency range)
freq list,pv list = Array.io.read pv files(input pv files)
freq,vel = Array.analysis.connect phase velocity(freq list,pv list,freqency range,plot flag=True)
Array.io.output pv file(output pv file,freq,vel)
```

スクリプトの使い方(Step2)

スクリプトファイルの赤字の箇所を書き換えます 02_pv_connect.py

fmax = 20.0
fmin_list = [12,8,4,2.5]



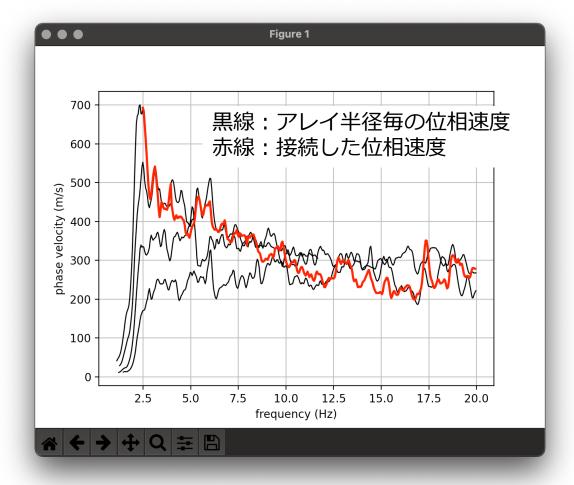
このような意味になります

10mアレイ 5mアレイ 2mアレイ 1mアレイ 2.5Hz - 4Hz 4Hz - 8Hz 8Hz - 12Hz 12Hz - 20Hz

 \longleftrightarrow

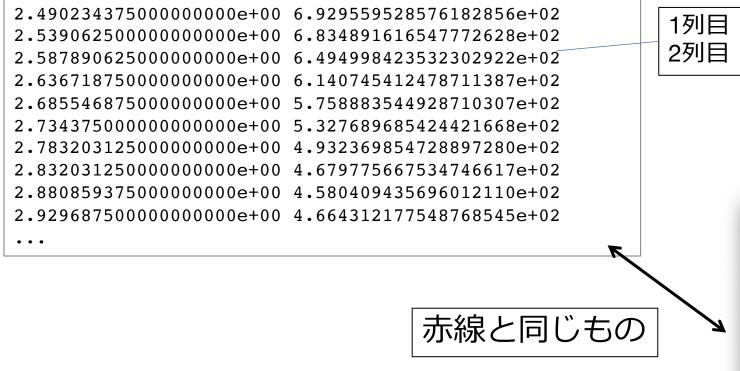
高周波数側から記述することに注意

出力されるグラフを見ながら, 接続周波数を調整します



出力結果(Step2)

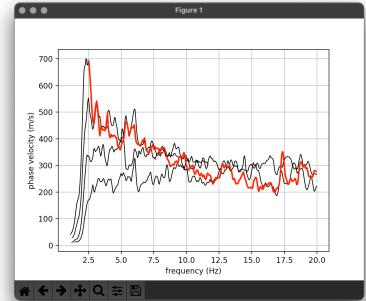
接続した位相速度がファイルに出力されます サンプルファイル (phase_velocity/KYT013.vel)



1列目:周波数 (Hz)

2列目: 位相速度 (m/s)

周波数一位相速度 (位相分散曲線)



使い方(Step3)

Step3

1次元速度モデルから位相速度とH/Vスペクトルを計算して フィッテイングさせる

使うスクリプト 03_model_pv.py

モデルのサンプル model/KYT013.dat

モデルファイルの準備 (Step3)

1次元速度モデルを設定します サンプルファイル (model/KYT013.dat)

```
# number of layers
5

# vs[m/s], vp[m/s], rho[kg/m3], depth[m]
140 240 1590 2
275 1550 1773 10
350 2260 2031 25
510 2260 2200 95
1000 2600 2400
```

1 モデルの層数(基盤含む)

|2||層毎の物性

1列目: S波速度 (m/s) 2列目: P波速度 (m/s)

3列目: 密度 (kg/m3)

4列目:下方境界面の深さ(m)

基盤の場合は空欄

スクリプトの使い方(Step3)

Array.io.output hv file(model hv file, freq sim, hv sim)

・スクリプトファイルの赤字の箇所を書き換えます

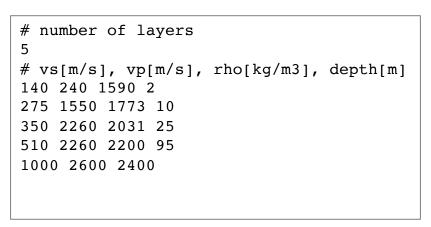
03_model_pv.py _____

位相速度のデータ H/Vスペクトルのデータ import numpy as np import Array observed pv file = "phase velocity/KYT013.vel" モデルファイル observed hv file = "hvsr/KYT013/hvsr.dat" model file = "model/KYT013.dat" モデルから計算された位相速度とH/Vスペクトルのデータ model pv file = "model/KYT013.vel" model hv file = "model/KYT013.hv" freq obs,vel obs = Array.io.read pv file(observed pv file,fmax=16) freq hv obs,hv obs = Array.io.read pv file(observed_hv_file,fmax=16) model = Array.io.read model file(model file) freq sim,vel sim,hv sim = Array.analysis.model phase velocity py(model,fmax=16,print flag=True,plot flag=False) Array.analysis.compare phase velocity(freq obs, vel obs, freq sim, vel sim) Array.analysis.compare hvsr(freq hv obs,hv obs,freq sim,hv sim) フィッティングさせる最大周波数 Array.io.output pv file(model pv file, freq sim, vel sim)

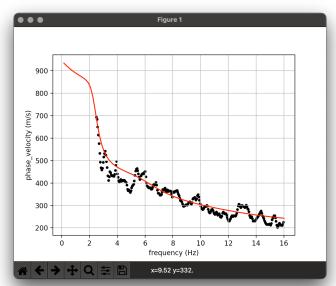
出力結果(Step3)

• モデルから計算された位相速度が観測位相速度にあうように, Rayleigh波楕円率がH/Vスペクトルにあうように,モデルを修正します

赤線が黒点にあうように, モデルを繰り返し修正する



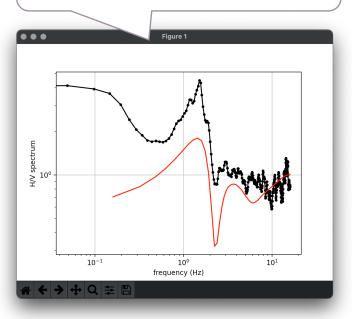




黒点:観測された位相速度(Step2)

赤線:計算した位相速度

(注意) 縦軸の大きさは 合わなくても良い!



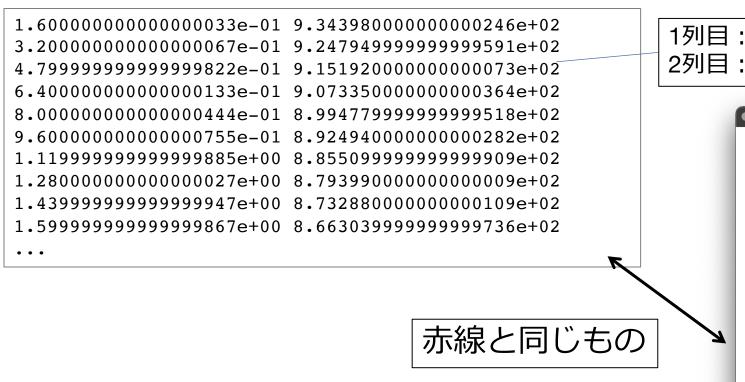
黒点:観測されたH/Vスペクトル

(Step0)

赤線:計算したRayleigh波楕円率

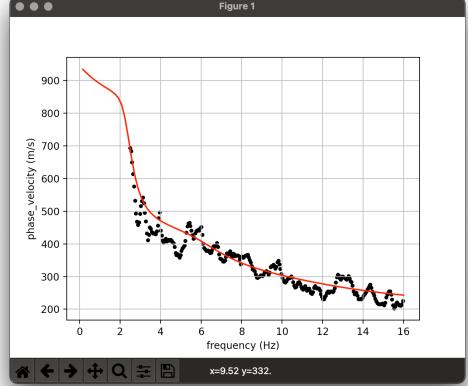
出力結果(Step3)

モデルから計算された位相速度がファイルに出力されます サンプルファイル (model/KYT013.vel)



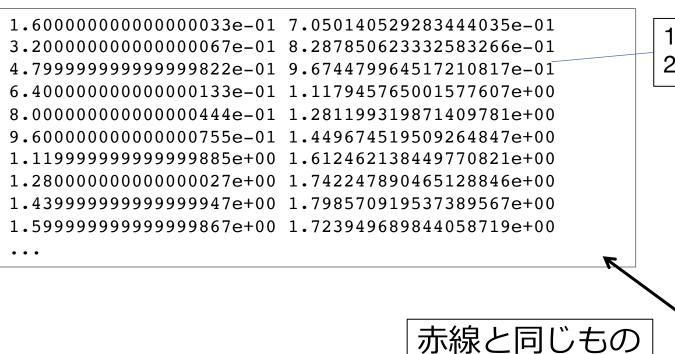
1列目:周波数 (Hz)

2列目: 位相速度 (m/s)



出力結果(Step3)

モデルから計算されたH/Vスペクトルがファイルに出力されます サンプルファイル (model/KYT013.hv)



1列目:周波数 (Hz)

2列目: H/Vスペクトル

